



先生がたに インタビュー！



英語あそびの時間の後、先生方にお話をうかがうことができました！

“Head and Shoulders, Knees and Toes”の歌をやるのは今回で2回目、“A-Hunting We Will Go”は3回目だそう。“A-hunting”のところをアハンと言って、その先生の言葉をやまびこのように子どもたちに真似してもらったり、アハンと言うと同時に肩を揺らすことで英語独特のリズムを身体で感じられるようにしたり、まさに英語を遊びとして楽しみつつ学べる工夫をしてくださっています。「歌」というところもポイントで、「朗読のリピートはハードルが高くて、リズムとメロディがついた歌詞なら子どもたちは歌えます。また歌は記憶に残ります。幼い頃歌ってた歌って今も歌えますもんね」とYumi先生。歌の力、すごいです。

初めの頃は……

今でこそ元よく先生の言葉を繰り返している子どもたちですが、初回は先生が「真似してね」と促しても何も返ってこなかったとのこと。初回Yumi先生はまず英語で自己紹介をされ、「先生の体にはスイッチがあるんだよ」と言いつつスイッチを押すふりをして、さっきの自己紹介を日本語でする、という導入をされたのだそう。目を丸くする子どもたちの様子が目に浮かびます。そして簡単な遊びから始め、英語の歌は聞くだけでいいとおっしゃったそうですが、楽しそうな先生方につられて、子どもたちはすぐに先生について歌ったそうです。ただ中には人前で歌うことが恥ずかしくて参加

しつがらない子もいて、そういう子には「嫌ならしなくてもいいよ」とお伝えになるそう。そんな子でも先生が時々声をかけたり、友達を楽しそうにしているのを見たりすると気になって、自分から参加してくれるようになることが多いのだそうです。

日本語も交える理由

Yumi先生が日本語も交えて英語あそびをされるのには理由がありました。英語しか使わない教師に教わった場合、挨拶のような反射的なやり取りはできるようになっても、言葉の本当の意味を理解せず、自分なりの解釈で済ませてしまうことが多いのだとか。Yumi先生によると「時々子どもが『ねえ good morning ってどういう意味？』と訊いてくるようなことがある」のだそう。「年中の子達って『わかりたい』という気持ちがすごく強いんです」とYumi先生。日本語でのサポートがあれば子どもたちは活動内容を理解し、集中しやすくなるのだそうです。

子どもの理解を深める工夫は他にもあり、「先生の話していることと先生の体の動き、子どもの見ていること聞いていることしていること、その全てが同じことを表すようにしています」とYumi先生。例えば“catch”と言いながら捕まえる真似をせよと、子どもたちの中で動作と言葉が結びついて印象に残りやすくなるとのこと。結果的には英語あそび以外でも友達を捕まえながら“catch”と言うなど、自ら遊びに取り入れられるようになってくれば、という狙いがあるそうです。